

山梨県北巨摩郡高根町

社 口 遺 跡

—八ヶ岳広域農道建設に伴う発掘調査—

1995.3

高根町教育委員会

山梨県峡北土地改良事務所

山梨県北巨摩郡高根町

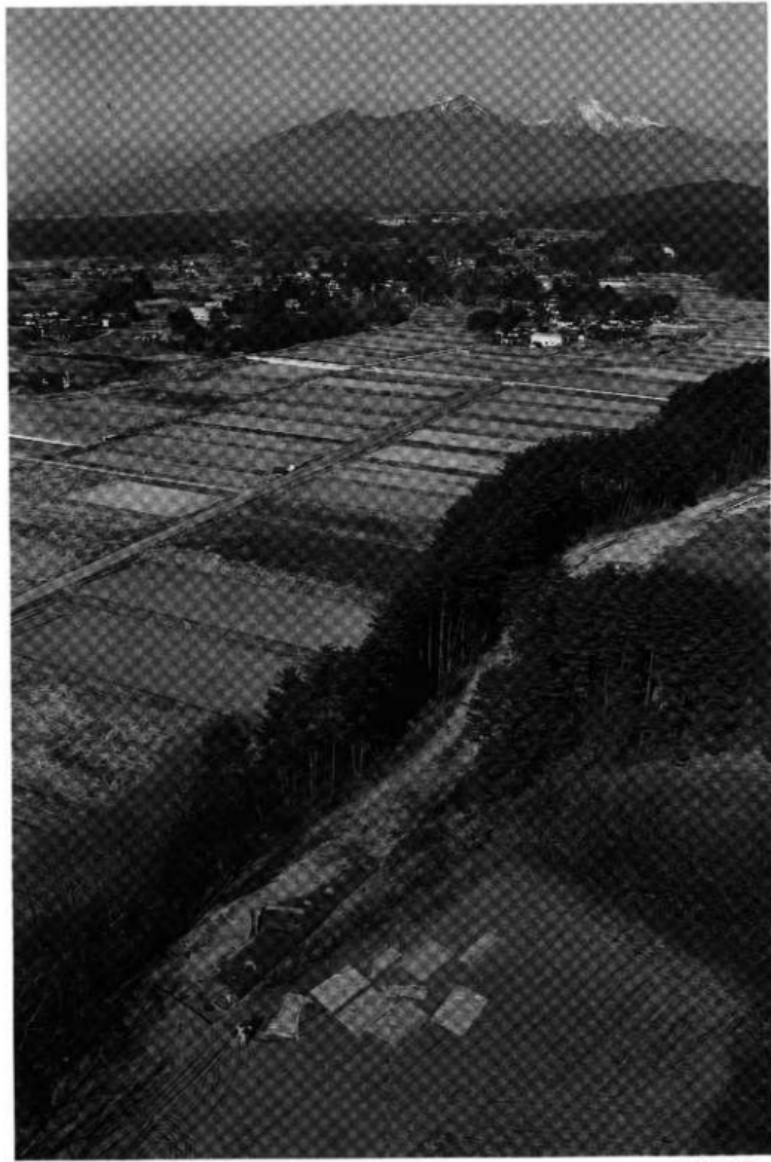
社 口 遺 跡

— 八ヶ岳広域農道建設に伴う発掘調査 —

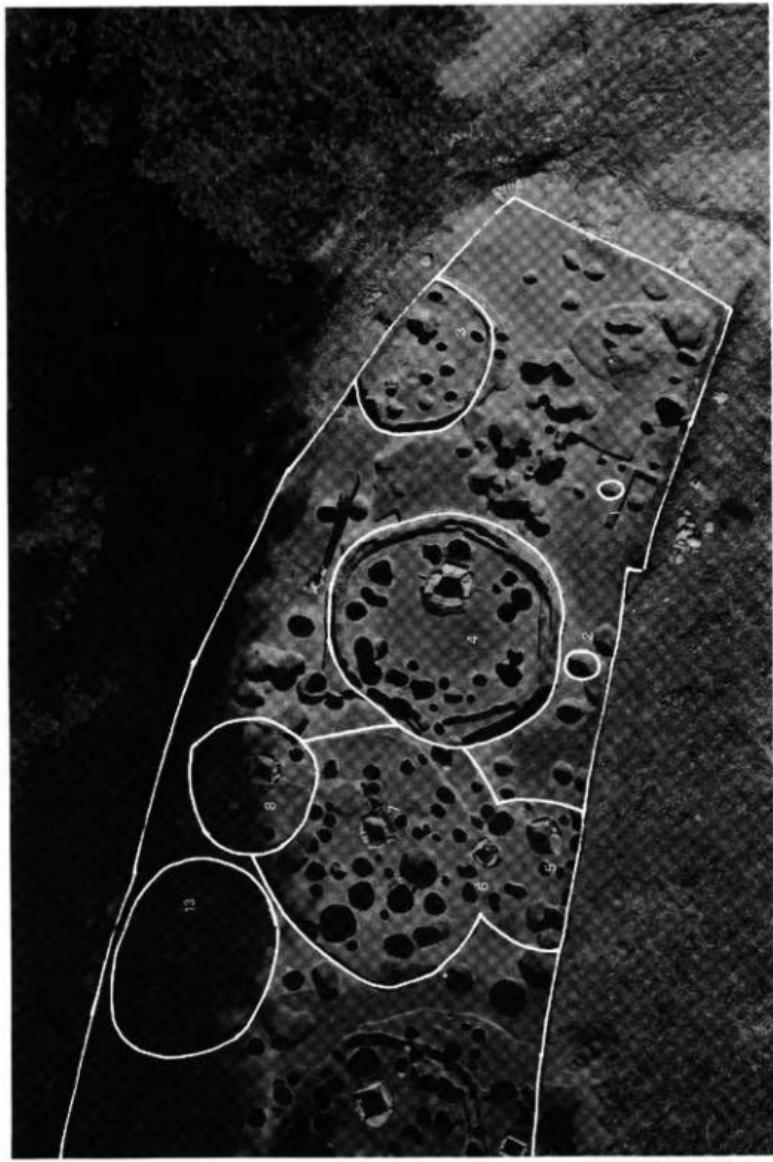
1995.3

高根町教育委員会

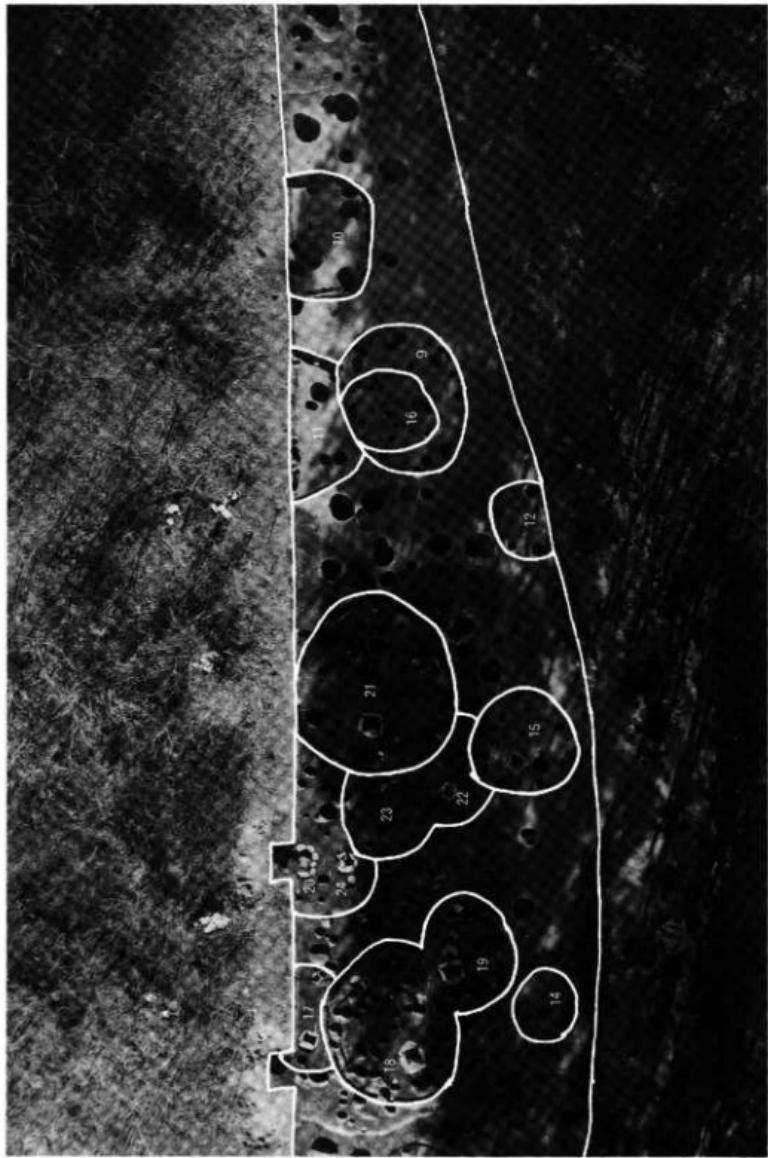
山梨県峡北土地改良事務所



全景写真



遺構空中写真 No.1



造構空中写真 No.2

序

本書は、八ヶ岳広域営農団地農道整備事業に伴い、発掘調査された山梨県北巨摩郡高根町村山北割字社口に所在する社口遺跡について、その成果をまとめたものであります。

高根町は、山梨県の北西部に位置し長野県と接する、青空と水と緑の八ヶ岳南麓に広がる高原の町です。

町内には、原始から古代・中世と続く遺跡が数多く発見されており、中でも町の中心部あたりから南部地域にかけては遺跡集中地域として分布図でも確認され、発掘調査によっても確認されております。

社口遺跡は、平成5・6年と調査し、平成5年度は180m²の調査で縄文中期中葉の住居址2軒、平成6年度は1,500m²の調査で縄文中期中葉の住居址1軒、後葉の住居址25軒、平安時代の住居址1軒と土坑100基が発見されています。

それに平安時代の鍛冶工房址と思われる土坑が2基検出されています。この地域一帯は通称金山、俗称鍛冶林（かじべーし）とも呼ばれていることから開拓時において遺構内より出土した鉄滓等により名付けられたものと思われます。

本遺跡は縄文時代を中心とした大集落であり、平安時代の集落も形成されていた、非常に規模の大きい遺跡であることがわかります。

今回の調査は、この大きな集落の西端の一部が調査されたことになります。今後の調査研究により、この遺跡の全貌が徐々にでも解明されることに期待したいと思いますが、今回の調査が研究の一助となれば幸いです。

末筆ながら、調査にあたってご指導・ご協力をいただいた関係機関各位、並びに調査に従事されたの皆様に深く感謝申し上げます。

平成7年3月

高根町教育委員会

教育長 中嶋 靖

例　　言

1. 本書は、広域管農団地農道整備事業（八ヶ岳工区）に先立ち、高根町教育委員会が実施した山梨県北巨摩郡高根町村山北割に所在する社口遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、県北土地改良事務所との負担協定により高根町教育委員会が実施した。
3. 調査は、平成5年度と平成6年度に行い、遺物整理は平成6年度に行った。
4. 発掘調査によって得られた出土遺物・記録図面及び写真等は、高根町教育委員会で保管している。
5. 発掘調査及び本書作成にあたり、次の諸先生方・諸機関よりご指導・助言・協力をいただいた。記して感謝申し上げる次第である。(順不同・敬称略)

末木 健、新津 健、小野正文、保坂康夫、伊藤公明、佐野 隆、県学術文化課、
県埋蔵文化財センター、帝京大学山梨文化財研究所、県県北土地改良事務所、
コンピュータ・システム㈱

6. 発掘調査組織

調査主体……高根町教育委員会

7. 発掘調査参加者(順不同・敬称略)

榎本 勝、清水貞子、菊原すえ子、菊原はつよ、白倉カツ子、清水島了、菊原幸男、
新海登子、坂本明子、清水てる子、河口はる子、川端下生子、小林文治、庭田金博、
奥水良教、小林昭子、小林みや子、坂本穂津美、仲嶋まゆみ、高柳静香、中嶋當子、
高柳博基、八巻久子、吉田香代子、浅川千鶴子、酒巻正道、細田絹代、浅川房子、
三井光恵、藤森里美、柏吉よしえ、藤森かねよ、藤森八千代、原藤 栄

8. 遺物整理参加者(順不同・敬称略)

榎本 勝、仲嶋まゆみ、八巻久子、吉田香代子、中嶋當子、清水貞子、清水島子、
原藤 栄、仲嶋 貴、白倉カツ子、坂本明子、小林昭子、田代 敦、酒巻正道、
植松梅子、三好悦子、木村次郎、岡本美恵子、大崎喜久江、清水みゆき

目 次

序 文

例 言・凡 例

第Ⅰ章 調査状況

I 調査による経緯と経過	1
II 周辺の地形	1
III 周辺の地質	3
IV 遺跡の立地	3
V 周辺の遺跡	3
VI 調査方法	5
第Ⅱ章 調査の成果	
I 遺構	5
1. 住居址	5
2. 土 坑	13
第Ⅲ章 小 括	14

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図(1)	2
第2図 社口遺跡と周辺の遺跡（中期末と平安）	4

図 版 目 次

図版 1 近景 北より	16
近景 南より	16
図版 2 平成5年度 第1号住造物出土状況	17
平成5年度 第1号住炉	17
平成5年度 炉内出土土器	17
図版 3 平成5年度 第1号埋甕検出状況	18
平成5年度 第2号住居址遺物出土状況	18
平成5年度 第2号住炉完掘状況	18

図版4	平成6年度 第1号住居址	19
	平成6年度 第2号住居址	19
	平成6年度 第3号住居址遺物出土状況	19
図版5	平成6年度 第3号住炉完掘状況	20
	平成6年度 第4号住居址	20
	平成6年度 第4号住炉検出状況	20
図版6	平成6年度 第4号住埋甕埋納状況	21
	平成6年度 第5号住炉検出状況	21
	平成6年度 第5号炉	21
図版7	平成6年度 第6号住炉検出状況	22
	平成6年度 第6号炉	22
	平成6年度 第7号住居址検出状況	22
図版8	平成6年度 第7号住炉検出状況 南より	23
	平成6年度 第7号住炉検出状況 東より	23
	平成6年度 第8号住居址検出状況	23
図版9	平成6年度 第8号住炉検出状況	24
	平成6年度 第4・5・6・7・8号住居址群状況写真	24
	平成6年度 第9号住居址遺物出土状況	24
図版10	平成6年度 第10号住居址遺物出土状況	25
	平成6年度 第11号住居址遺物出土状況	25
	平成6年度 第9・11・16号住居址群完掘状況	25
図版11	平成6年度 第12号住居址検出状況	26
	平成6年度 第12号炉	26
	平成6年度 第12号石組及び石皿出土状況	26
図版12	平成6年度 第13号住居址検出状況	27
	平成6年度 第13号炉	27
	平成6年度 第14号住居址検出状況	27
図版13	平成6年度 第14号住遺物出土状況	28
	平成6年度 第15号住居址検出状況	28
	平成6年度 第15号炉	28
図版14	平成6年度 第16号住完掘状況	29
	平成6年度 第16号炉	29
	平成6年度 第17号住検出状況	29

図版15	平成6年度 第17号住居址完掘状況	30
	平成6年度 第18号住居址検出状況	30
	平成6年度 第18号炉	30
図版16	平成6年度 第19号住居址検出状況	31
	平成6年度 第19号炉	31
	平成6年度 第20号住居址炉検出状況	31
図版17	平成6年度 第21号住居址検出状況	32
	平成6年度 第21号炉完掘状況	32
	平成6年度 第21号埋甕埋納状況	32
図版18	平成6年度 第22号住居址検出状況	33
	平成6年度 第22号炉	33
	平成6年度 第23号住居址炉完掘状況	33
図版19	平成6年度 第24号住居址石組検出状況	34
	平成6年度 第24号炉	34
	平成6年度 第25号住居址検出状況	34
図版20	平成6年度 第25号住居址炉完掘状況	35
	平成6年度 第26号住居址検出状況	35
	平成6年度 第26号炉	35
図版21	平成6年度 第23号上坑遺物出土状況	36
	平成6年度 第49号土坑遺物出土状況	36
	平成6年度 第65号土坑遺物出土状況	36
図版22	平成6年度 第27号住居址完掘状況	37
	平成6年度 第27号カマド	37
	平成6年度 第1号土坑検出状況	37

第Ⅰ章 調査状況

I 調査に至る経緯と経過

山梨県では、農村振興政策の一環として農業基盤整備事業すなわち水田等の区画整理のほかに、農産物の集中化・効率的な集・出荷等を目的とした大型農道（レインボーライン）を駿北地区に建設している。

社口遺跡は、北巨摩郡高根町大字村山北割から大字村山東割にかけて存在し、この地区は八ヶ岳広域農道の建設が予定されていた地域であり、1990年11月に山梨県農務部駿北上地改良事務所から県教育委員会文化課に、具体的な工事計画が提出された。この計画に基づき高根町教育委員会が実施した分布調査報告書によると、この一帯には能久保遺跡及び社口遺跡として登録されている周知の遺跡が所在しており、文化課から依頼を受けた山梨県埋蔵文化財センターが現地踏査を行い、1991年5月に試掘調査を実施した。その結果、縄文中期及び平安にかけての土器が出土するし、いくつかの落ち込みが確認されている。

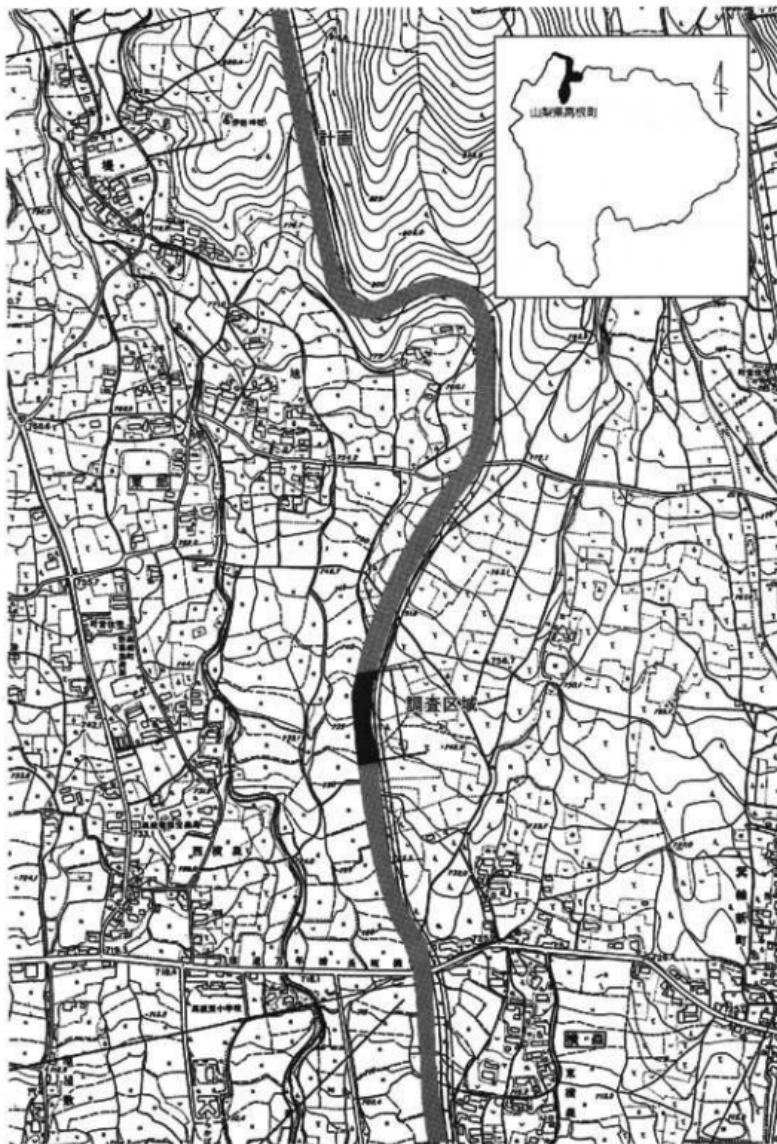
その結果に基づき、文化課・埋蔵文化財センター・耕地課・駿北上地改良事務所で協議を行い調査は高根町教育委員会により1994年1月から2月と1994年8月から12月まで行い、発掘調査終了後引き続き整理作業を行い、報告書作成にいたった。

II 周辺の地形

高根町は、山梨県の北西部に県境として聳えている八ヶ岳の南麓に広がる高原の町である。この山は、日本列島を東西に二分する大地溝帯上（フォッサマグナ）に噴火した火山性の山であり、噴出物の特性のため裾野は比較的なだらかな地形（台地状をてうする）であるが、町内東部は飯盛山火山群に属するため、この周辺はやや急峻である。

八ヶ岳からつづくこの台地は、国道141号線の盐崎から小猪へ抜ける途中の弘法坂付近で合流する大門川と川俣川によって2つに区分することができ、北側は標高約1,000m以上の亜高山帯に属し、南側は標高約600mから約900mの範囲で高根町の主要部を占め、基幹作物は水稻等を主としている。

町の東は八ヶ岳の赤岳を水源とし南流する川俣川・大門川（須玉川）によって侵食された比高差約100mを測る垂直に切り立った崖が20数cm南北につづき、北は前述の南北に折り重なるよう列になった八ヶ岳連峰によって隔離された地域となっている。唯一開けた西側も隣町である長坂町及び小瀬沢町の西側を南流する茶無川（富士川）によって隔離されているが、この両河川に挟まれた台地は、南北20数km、東西の最大幅は10数kmを測り、台地上を流れる小河川は



第1図 遺跡位置図(1)

南流し、前述の両大河川に合流している。

III 周辺の地質

八ヶ岳は、本州を中央で二分する大地構造＝糸魚川静岡構造線上に噴火した火山群で、その生成時期は地質年代で第三紀末から第四紀の洪積世前期といわれ、形成している熔岩はいわゆる輝石安山岩類で標高1,000m以上に分布し、それ以下の広大な山麓の斜面は、熔岩の粉砕物や、噴火による堆積物からなる火山質腐植土の黒褐色をした表土が覆っている。

標準的な七層堆積状態は上から、黒色土＝耕作土（20～40cm）、ローム層（3～4m）、御岳山を起源とする細粒軽石層いわゆる鹿沼土が（40～60cm）、白色系粘土層（10～20cm）、暗赤褐色礫粘土層（八ヶ岳火砕泥流）となる。

IV 遺跡の立地

当遺跡は、国道141号線（佐久甲州街道）の箕輪新町で交差する県道長坂高根線を長坂方面に西進し、高根町総合グラウンドのすぐ南の標高約730mを測る台地上に立地している。

遺跡は、台地上に孤立した標高約920mの朝日山の南側に広がる微高地からそれにつながる低地への連続した比較的平坦地を形成し、現況は桑畠・蔬菜畠・荒れ地でありこの中に所在した。

V 周辺の遺跡

八ヶ岳南麓の広大な裾野は、東側は須玉川による大きな侵食を受け比高差約100mを測る崖線が形成されている。この台地上には南流する小河川が数条存在し、この小河川によって開拓された台地上には浮き島が点在しここからつづく台地上の標高730mに社口遺跡は所在する。

当遺跡が立地する八ヶ岳南麓はその豊かな大地と水等により先史時代から多くの遺跡が存在する。本遺跡の主要な時期である縄文時代中期中葉から後葉及び平安時代にかけての遺跡を概観してみると（第1図）すぐ西側に青木遺跡(1)縄文時代中期中葉から後期中葉にかけての配石遺構を伴う集落、青木北遺跡(2)平安時代の集落、東久保遺跡(3)平安時代の鍛冶工房址を伴う集落、下風呂遺跡(4)縄文時代中期末の集落、ハッ牛遺跡(5)平安時代の集落、川又坂上遺跡(6)縄文時代中期末から後期初頭にかけてと平安時代の集落、梅ノ木遺跡(7)縄文時代中期中葉の集落、高内遺跡(8)弥生時代後期と平安時代の集落、海道前遺跡(9)縄文時代中期末と平安時代の集落、上ノ原遺跡(10)縄文時代中期中葉の集落、石堂A遺跡(11)平安時代の集落、野添遺跡(12)縄文時代中期後葉の集落、西の原遺跡(13)縄文時代中期中葉と平安時代の集落、西原遺跡(14)平安時代の集落、西原北遺跡(15)平安時代の集落、藤林寺跡遺跡(16)平安時代の集落等があげられる。これらの遺跡



第2図 社口遺跡と周辺の遺跡(中期末と平安)

は、すべて発掘調査によって検出された遺跡であり、工事の性格上遺跡全体を調査したものではなく、遺跡内的一部を調査したに過ぎない。しかしながら、このように遺跡が多く見受けられるのは、それだけ住みよい立地条件があればこそであろう。

VI 調査方法

試掘調査の結果により工事対象面積の全域から遺構の広がりが確認されたことにより、面積が広範囲であるため、重機によって表土を除去し、遺構の確認及び掘り下げは人力によって行った。

遺跡内に任意で10m四方のグリッドを設定し、その中を4等分して5mをサブグリッドとして遺構の確認状況に合わせて調査を行った。

第Ⅱ章 調査の成果

I 遺構

1. 住居址

確認された住居址は、遺跡内のほぼ全域で確認され住居址の集中する部分も存在した。遺構精査中に遺物の集中した部分は住居址群であった。

平成5年度に検出された遺構は縄文時代中期の住居址2軒、平成6年度に検出された遺構は縄文時代中期の住居址25軒、平安時代の住居址1軒である。以下に個々に説明していきたい。

平成5年度分

第1号住居址

調査区中で最も北に位置する。ローム層を掘り込んで造られているものの、一部が調査区域外に延びることと、全体的に耕作による搅乱を受けており壁の立上りは不鮮明であるが直径約4.6mの円形と推定される。炉は、住居址の中央よりかなり北側に偏って位置する。1辺約70cmの方形を呈する石團炉で炉石の設置状態は非常によく、長く使用されていたようで炉石の表面は激しく剥落し、石自体にも亀裂が入っている。が内の南西の隅に深鉢が1個立てかけてあるかのように存在した。この深鉢には被熱を受けたような二次焼成は見受けられず、炉底絶直後設置されたと思われる。がの掘り方は直径約1mのほぼ円形を呈し、深さは床面より30cmを測り、炉内の焼土の堆積は良好であった。ビットは6ヶ所確認されているが、主柱穴となるも

のは4本であろう。住居址の出入りと思われる所に埋甕がほぼ一直線上に3個体設置されている。住居内の西に偏った位置に第1号土坑があり、この住居に伴うかどうかは不明である。

遺構が確認できた場所は、黒色土の堆積があり、遺構精査中より遺物の集中する場所であり、床面直上から出土した遺物はごくわずかであり、出土遺物のほとんどが住居内中央付近の比較的高い位置で確認されている。

第2号住居址

第1号住居址のすぐ南に位置する。ローム層を掘り込んで造られているものの、一部が調査区域外に延びることと、全体的に耕作による搅乱を受けており壁の立上りは不鮮明であるが直径約5mの円形と推定される。炉は、住居址の中央よりかなり北側に偏って位置する。1辺約70cmの方形を呈する石圓炉で炉石の設置状態は非常によく、長く使用されていたようですが石の表面は激しく剥落し、石自体にも亀裂が入っている。炉の外の北西の角に1辺20cmの副炉と思われる配石が構築されている。炉の堀り方は直径約1.2mのほぼ円形を呈し、深さは床面より30cmを測り、炉内の焼土の堆積は良好であった。ピットは7ヶ所確認されて、主柱穴となるものは、4本であろう。遺構が確認できた場所は、黒色土の堆積があり、遺構精査中より遺物の集中する場所であり、床面直上から出土した遺物はごくわずかであり、出土遺物のほとんどが住居内中央付近の比較的高い位置で確認されている。

平成6年度分

第1号住居址

平成5年度に調査を行った第2号住居址より南に5m離れて位置する。全体的に耕作による削平を受けており壁の立上りは確認することができずがのみによる確認である。この住居址は炉の確認によってのみ存在する。が石の残存状況は東と北に3個残るのみであり、あとは取り除かれていた。堀り方は直径約80cmのほぼ円形を呈し、深さは床面より約30cmを測り、が石自体の埋込は浅いものであり、焼土の堆積もそれほどではなかった。ピットは確認することができなかった。

第2号住居址

第1号住居址より南に3mほど離れたところに位置する。全体的に耕作による削平を受けており壁の立上りは確認することができずがのみによる確認である。この住居址も第1号住居と同様にがのみであるが、炉石の残存状況は比較的良好、四方の石はすべて残っていた。堀り方は直径約80cmのほぼ円形を呈し、深さは床面より約30cmを測り、炉石自体の埋込は浅いものであり、焼土の堆積もそれほどではなかった。ピットは確認することができなかった。

第3号住居址

第2号住居址から西に3mほど離れたところに位置する。ローム層を掘り込んで造られているものの、遺構のほぼ半分が既存の道路により削り取られていることと、全体的に耕作による搅乱を受けており壁の立上りは不鮮明であるが直径約4mの円形と推定される。炉は、住居址中央部よりやや北側に位置する。1辺約70cmの方形を呈する石囲炉で炉石の設置状態は非常によく、長く使用されていたようですが石の表面は激しく剥落し、石自体にも亀裂が入っている。炉の外の北西と北東の両角に配石が構築されている。炉の堀り方は直径約1mのほぼ円形を呈し、深さは床面より30cmを測り、炉内の焼上の堆積は良好であった。ピットは11ヶ所確認されており、主柱穴となるものは、4本であろう。埋甕が1ヶ所より確認されている。

第4号住居址

第3号住居址から東南に5mほど離れたところに位置する。ローム層を掘り込んで造られているものの、遺構検出中より多量の土器が広範囲にわたって出土したため、複数の遺構の存在を推定されたが、炉・ピットの検出等によりより一軒の存在であることが判明した。直径約8mの八角形と思われる。炉は、住居址中央部よりやや北側に位置する。1辺約1.2mの方形を呈する石囲炉で炉石の設置状態は非常によく、長く使用されていたようで炉石の表面は激しく剥落し、石自体にも亀裂が入っている。炉の外の北側に配石が構築されている。炉の堀り方は直径約1.5mのほぼ円形を呈し、深さは床面より70cmを測り、炉内の焼土の堆積は良好であった。

ピットは23ヶ所確認されており、主柱穴となるものは、6本であろう。埋甕が1ヶ所より確認されている。炉の西側より完形の小形深鉢1個体、住居内東壁直下に丸石が2個出土し、住居内覆土からは、多量に出土している。

第5号住居址

第4号住居址より東南に5mほど離れたところに位置する。全体的に耕作による削平を受けしており壁の立上りは確認することができず炉のみによる確認である。このことにより形状・規模は不明である。炉は、住居址中央部よりやや北側に位置すると思われ、1辺約70cmの方形を呈する石囲炉で炉石は西と南の石が第6号住居により取り除かれていたが、長く使用されていたようで炉石の表面は激しく剥落し、石自体にも亀裂が入っている。炉の堀り方は直径約1mのほぼ円形を呈し、深さは床面より50cmを測り、炉内の焼土の堆積は良好であった。

第6号住居址

第4号住居址より南に5mほど離れたところに位置する。第7号住居址の調査中に確認された住居で、第5号と第7号の中間に位置し、プラン確認を行ったが具体的には確認できなかつた。炉は、住居址中央部よりやや北側に位置すると思われ、1辺約70cmの方形を呈する石囲炉で

炉石の設置状態は非常によく、長く使用されていたようで炉石の表面は激しく剥落し、石自体にも亀裂が入っている。がの堀り方は直径約1mのほぼ円形を呈し、深さは床面より50cmを測り、炉内の焼土の堆積は良好であった。

第7号住居址

第4号住居址のすぐ南に位置する。ローム層を掘り込んで造られているものの、遺構検出中より多量の土器が広範囲にわたって出土したため、複数の遺構の存在を推定されたが、炉・ピットの検出等によりより4号住居址と6号住居址と切りあって存在することが判明した。直径約7mの八角形と思われる。炉は、住居址中央部よりやや北側に一直線上に2基存在し、2基とも石囲炉であるが、南炉は床面を堀込んで設置されておらず直置きであった。南炉は、長軸約70cm、短軸約50cmの南北に長い長方形を呈している。北炉は1辺約40cmの方形を呈し、炉石の設置状態は非常によく床面を堀込んで設置されていた。長く使用されていたようで両炉石とも表面は激しく剥落し、石自体にも亀裂が入っている。炉内の焼土の堆積は良好であった。ピットは26ヶ所確認されており、主柱穴となるものは、6本であろう。住居内南東部より土坑2基が検出されている。埋甕が北炉の北西より2ヶ所より確認されている。

第8号住居址

第7号住居址のすぐ西に位置する。ローム層を掘り込んで造られているものの、遺構検出中より多量の土器が広範囲にわたって出土したが、壁下に周溝がみられたこと等から単独で存在することが判明した。直径約4mの円形と思われる。炉は、住居址中央部よりやや北側に位置する。1辺約1mの方形を呈する石囲炉で炉石の設置状態は非常によく、長く使用されていたようで炉石の表面は激しく剥落し、石自体にも亀裂が入っている。炉石の南西の隅の組合せ部分に直径10cm・高さ50cmの中型の石棒が1本組み込まれていた。炉の堀り方は直径約1mのほぼ円形を呈し、深さは床面より50cmを測り、炉内の焼土の堆積は良好であった。

ピットは7ヶ所確認されており、主柱穴なるものは、4本であろう。埋甕が南の周溝内側より1個体確認されている。

第9号住居址

第7号住居より南に22mほど離れたところに位置する。ローム層を掘り込んで造られているものの、遺構検出中より多量の土器が広範囲にわたって出土したが、第11号住居との切り合いが認められた。長軸約6m短軸約5mの梢円形と思われる。炉は、住居址中央部よりやや北側に位置するが、炉石の残存状況は非常に悪く北側の一部がわずかに残るのみであった。炉の堀り方は直径約70cmのほぼ円形を呈し、深さは床面より50cmを測り、炉内の焼土の堆積は良好であった。ピットは7ヶ所確認されており、主柱穴なるものは、4本であろう。埋甕が南の周溝

内側より 1 個体確認されている。

第10号住居址

第9号住居址より南東に10mほど離れたところに位置する。ローム層を掘り込んで造られているものの、遺構検出中より多量の土器が広範囲にわたって出土したが、他の切り合いは認められず単独で存在し、約半分が調査区域外に延びるため、プランの断定はできないが、1辺約5mの隅丸方形と思われる。検出されたピット及び周溝の状況により1回以上の建替えがあったようである。炉は、住居址中央部よりやや北側に位置する。すでに炉石は取外されており、炉の堀り方は直径約1mのほぼ円形を呈し、深さは床面より50cmを測り、炉内の焼土の堆積は良好であった。炉のすぐ脇に炉体に使用されたと思われる石が2個残されていた。ピットは3ヶ所確認されており、主柱穴なるものは、そのうち2本であるが、調査区域外に延びるため構成は不明である。埋甕が南の周溝内側より1個体確認されている。

第11号住居址

第9号住居址のすぐ東に位置する。ローム層を掘り込んで造られているものの、遺構検出中より多量の土器が広範囲にわたって出土したが、西側は第9号住居址と切り合い東側は調査区域外に延びるため、プランの断定はできないが、直徑約5mの不定円形と思われる。

炉は、調査区域外に残っているものと思われる。ピットは2ヶ所確認されており、住居に伴うものかは不明である。

第12号住居址

第9号住居址より北西に6mほど離れたところに位置する。ローム層を掘り込んで造られているものの、西側は斜面に延び耕作及び既存の道路により削平されているため、プランの断定はできないが、長軸約3m短軸約2mの楕円形と思われる。炉は、住居址中央部よりやや北側に位置する。炉石は床面を堀込んで構築されておらず、床面に直置きであった。炉自体はそれほど使用されておらず炉石はほとんど自然石の状態であり、焼土の堆積も見受けられなかった。

ピットは3ヶ所確認されており、3本とも住居に伴うものであろう。出入口と思われるところに河原石を3個組み合わせた石圍炉に似た施設が作られていた。このそばには石皿を伏せたような状況で出土している。これらがこの住居に伴うものかは不明であるが、石組みの調査を行ったが、焼土は確認できなかったので、炉ではなく、埋甕の一種ではなかろうか。

第13号住居址

第8号住居址のすぐ南に位置する。ローム層を掘り込んで造られているものの耕作による搅乱及び削平によりプランの断定はできないが、長軸約6m短軸約5mの楕円形と思われ、床面

の精査により炉が2基構築されていた。炉は、確認された住居内の中央部よりやや北側とやや南側に位置する。両炉とも炉石はすでに抜き取られておりわずかにその痕跡を残す石があるのみであった。南炉の堀り方は直径約1mのほぼ円形を呈し、北炉の堀り方は直径約80cmのほぼ円形を呈し、深さは両炉とも床面より50cmを測り、が内の焼土の堆積は良好であった。

ピットは3ヶ所確認されており、3本とも住居に伴うものであろう。

第14号住居址

第13号住居址のすぐ南に位置する。ローム層を掘り込んで造られているものの耕作による搅乱及び削平によりプランの断定はできないが、長軸約3m短軸約2mの楕円形を呈すると思われる。炉は、住居址中央部よりやや北側に位置する。1辺約50cmの方形を呈する石閉炉で炉石の設置状態は非常によく、それほど長く使用されていた痕跡はみられず炉石の表面には被熱を受けたような激しい剥落はみられなかつたが、石自体には亀裂が入っていた。炉の堀り方は直径約1mのほぼ円形を呈し、深さは床面より50cmを測り、炉内の焼土の堆積はあまりみられなかつた。がの北側より床面直上より吊手土器が出土している。

第15号住居址

第12号住居址と第14号住居址のほぼ中間に位置する。ローム層を掘り込んで造られているものの耕作による搅乱及び削平によりプランの断定はできないが、直径約5mの不定円形を呈すると思われる。がは、住居址中央部よりやや北側に位置する。炉石はすでに抜き取られておりわずかにその痕跡を残す石があるのみであった。炉の堀り方は直径約1mのほぼ円形を呈し、深さは床面より50cmを測り、が内の焼土の堆積は良好であった。炉内の焼土の堆積は良好であった。ピットは15ヶ所確認されており、主柱穴なるものは、4本であろう。

第16号住居址

第9号住居址の床面精査に併せ検出された住居であり、プランは直径約6mの不定円形を呈すると思われる。炉は、住居址中央部に位置し、炉石は東側の炉石は抜き取られていた。炉の堀り方は極めて小さく炉石ぎりぎりの大きさで掘られており炉内の焼土の堆積は良好であった。ピットは15ヶ所確認されており、住居の主となるピットは6本であろう。住居の覆土からは遺物の出土はみられなかったもののがの東側より床面直上から両把手付の小形甌が出土している。

第17号住居址

第7号住居址より南東に5mほど離れたところに位置する。この一帯で検出された住居址群は計5軒あり、切り合いがあり遺構のプランは不確定であり、炉により遺構名をつけた。この住居はその中でも一番東側にあり第18号住居により切られて存在し、遺構自体は東側の調査によ

域外に広がる。炉は、住居址中央部よりやや北側に位置すると思われ、1辺約60cmの方形を呈する石囲炉で炉石の設置状態は非常によく、炉石の表面には被熱を受けたような激しい剥落はみられなかつたが、石自体にも亀裂が入つてゐた。炉の堀り方は直径約1mのほぼ円形を呈し、深さは床面より50cmを測り、炉内の焼土の堆積は良好であった。

第18号住居址

第17号住居址より西に4mほど離れたところに位置する。周溝の検出により直径約6mのほぼ円形を呈すると思われる。炉は、住居址中央部よりやや北側に位置すると思われ、1辺約80cmの方形を呈する石附がたが石の設置状態は非常によく、炉石の表面には被熱を受けたような激しい剥落はみられなかつたが、石自体にも亀裂が入つてゐた。炉の堀り方は直径約1mのほぼ円形を呈し、深さは床面より50cmを測り、炉内の焼土の堆積は良好であった。

第19号住居址

第18号住居址より南西に4mほど離れたところに位置するが、床面の精査を行つたが周溝は検出できなかつた。炉は、住居址中央部よりやや北側に位置すると思われ、1辺約70cmの方形を呈する石囲炉で炉石の設置状態は非常によく、長く使用されていたようで炉石の表面は激しく剥落し、石自体にも亀裂が入つてゐた。炉石の南西と南東の両隅の組合せ部分に直径10cm・高さ50cmの中型の石棒が1本づつ組み込まれていた。炉の堀り方は直径約1mのほぼ円形を呈し、深さは床面より50cmを測り、炉内の焼土の堆積は良好であった。炉に付隨すると思われるが、平石を3個用いた配石が炉の南に構築されていた。

第20号住居址

第17号住居址より南に7mほど離れたところに位置する遺物集中部において遺構の精査をしていて炉によって確認された住居である。炉は、住居址中央部よりやや北側に位置すると思われ、長軸約80cm短軸約50cmの長方形を呈すると思われ、床面に直に石を設置している。検出された時点では東側の炉石は確認されずさらに東に伸びるものとして調査を行つたが上坑により炉石はすでに抜かれていた。炉内の焼土の堆積はほとんど見受けられなかつた。

第21号住居址

第15号住居址のすぐ東に位置する。ローム層を掘り込んで造られており、北は壁の立上りにより確認されたものの南側は耕作による搅乱及び削平により周溝によって、直径約8mの六角形を呈すると思われる。炉は、住居址中央部よりやや北側に位置し、1辺約1mの方形を呈する石囲炉で炉石の設置状態は非常によく、長く使用されていたようで炉石の表面は激しく剥落し、石自体にも亀裂が入つてゐる。炉の堀り方は直径約1mのほぼ円形を呈し、深さは床面よ

り70cmを測り、炉内の焼土の堆積は良好であった。炉外の南西の隅に上器が設置されていた。ピットは15ヶ所確認されており、住居内の位置関係や深さから6本であろう。

第22号住居址

第15号住居址のすぐ東に位置する。ローム層を掘り込んで造られており、北は壁の立上りにより確認されたものの南側は耕作による搅乱及び削平により周溝によって、直径約4mの円形を呈すると思われる。炉は、住居址中央部よりやや北側に位置し、1辺約70cmの方形を呈する石囲炉で炉石の設置状態は非常によく、長く使用されていたようで炉石の表面は激しく剥落し、石自体にも亀裂が入っている。炉の堀り方は直径約1mのほぼ円形を呈し、深さは床面より70cmを測り、炉内の焼土の堆積は良好であった。ピットは4ヶ所確認されており、住居内の位置関係や深さから2本である。

第23号住居址

第22号住居址のすぐ東に位置する。ローム層を掘り込んで造られているものの住居址による搅乱によりプランは確認できなかった。炉石は、すでに抜かれており、炉の堀り方は直径約1mのほぼ円形を呈し、深さは床面より50cmを測り、炉内の焼土の堆積は良好であった。ピットは確認されていない。

第24号住居址

第20号住居址のすぐ西に位置する。第20号住居址の遺構検出中に確認され丸石を伴う配石遺構と思われたが、その後の調査により炉であることが確認された。ローム層を掘り込んで造られているものの住居址による搅乱によりプランは確認できなかった。炉石の上面に石組みがみられ石を取り除いていくと石囲炉であることが確認された。炉石の構築状態は非常によく1辺70cmを測り、ほぼ方形であった。炉の堀り方は直径約1mのほぼ円形を呈し、深さは床面より50cmを測り、炉内の焼上の堆積は良好であった。

第25号住居址

第10号住居址より南に68mほど離れたところに位置する。遺構の残存状況は非常に悪く耕作等による削平を受けており、炉によって確認された住居である。炉は、住居址中央部よりやや北側に位置すると思われ、炉石はすでに抜かれていた。炉の堀り方は直径約1mのほぼ円形を呈し、深さは床面より50cmを測り、炉内の焼上の堆積は良好であった。

第26号住居址

第25号住居址より南西に20mほど離れたところに位置する。遺構の残存状況は非常に悪く耕

作等による削平を受けており、炉によって確認された住居である。がは、住居址中央部付近に位置すると思われ、が石は東側の1個を除いてすでに抜かれていた。炉の堀り方は直径約1mのほぼ円形を呈し、深さは床面より50cmを測り、炉内の焼土の堆積は良好であった。

ピットは4本確認されすべて住居に伴うものであろう。

第27号住居址

調査区中で最も南に位置し、プランは東西4.6m南北4mの隅丸方形を呈し、主軸方向はN-90°-Eである。壁の状態は北側は良好であるが南側は斜面に位置し耕作等によって削半されており、北壁70cm、南壁15cmを測る。周溝は、カマド部分と南側の一部を除き全周する。幅10cm、深さ10cmである。床面は、比較的良好であったがピットは確認されていない。

カマドは、東壁の南よりに構築されており、石組みカマドである。住居内覆土からは遺物の出土はみられなかったものの床面上付近から鎌および上師器の皿が出土している。

2. 土 坑

調査区域内の全域で七坑が確認されており、調査地域が桑畠等であるため耕作が激しく行われたことが推測され、削平及び後世の搅乱が考えられる。当報告では、土坑内より遺物が出土したものを中心説明を行う。

第23号土坑

第15号住居址と切り合い存在している。直径約1mのほぼ円形で深さは約70cmを測る。

第49号土坑

第10号住居址と切り合い存在している。直径約1mのほぼ円形で深さは約50cmを測り、内部上面より底部を欠損した土器と石皿が出土している。

第65号土坑

第18号住居址の住居内に存在している。直径約1mのほぼ円形で深さは約50cmを測り、底部よりほぼ一個体分の土器が出土している。

第Ⅲ章 小括

社II遺跡の発掘調査は、縄文時代の大規模な集落址の発見という大きな成果を得た。ここに若干の考察と問題点を記してみたいと思う。

遺構については、前述してきたように竪穴住居址29軒、土坑90基、溝状遺構1条、単独の埋甕2基、その他の遺構4基の計126基である。それぞれについて、総合して見てみたいと思う。

住居址について

検出された住居址のうち縄文時代中期に属する住居は28軒あり、大きくみると中期中葉が1軒、残りはすべて中期後葉に属する。中葉は出土した土器により藤内式と思われ、後葉は出土した土器により曾利式と加曾利E式と思われる。しかし、床面直上より土器が出土する住居は少なく、すべてがこの時期に該当するかは今後の精査が必要である。

住居址の形状及び規模は円形及び椭円形を基本とし、大型になるにつれて多角形化を呈するようである。直径3~6mを測るものは円形及び椭円形であり、直径6mを越えるものは六角形や八角形になるが、1軒だけほぼ半分の調査であるが隅丸方形を量する住居が確認されている。このような状況の中で、柱穴は4本、6本、8本掘られており、必ずといっていいほど炉の後に主となる柱穴がみられる。

検出された炉は、基本的には石圓炉であるが、炉石の構築の仕方によって分けることができる。1つは、比較的大きな平石を用いて床面を掘り下げ、下に垂直あるいは傾斜させて炉石を設置するもの、1つは河原石を用いて床面直上に石を並べただけのものである。この違いは、おそらく炉を設置する時間あるいは炉材としての石材がなかったことを示すものと思われるが、今後の資料の集積を待ちたい。この中で床下まで掘り下げた炉を持つ住居の炉の石組の中に石棒を組み込んだ住居は第8号住居址と第19号住居址の2軒が検出されている。

当遺跡において、炉の付随施設として石組みが2造構検出されている。第4号住居址は北側に、第19号住居址は南であり、石組みの石の個数は違うものの構築理由は同等と思われるが、この時期以降に見受けられる敷石住居の初源ではなかろうか。

検出された住居は3ないし4軒を一つの単位として小集落を形成しているようであり、それが環状になって大集落となっているようである。

当遺跡で平安時代の遺構は、住居1軒土坑2基の計3遺構であるが、昭和58年度に調査を行った東久保遺跡（平安時代の鍛冶工房址を伴う大集落）のすぐ東に位置し関係が注目されるところである。実際検出されている土坑内から鍛冶工房址を裏付ける鉄滓及び羽口が出土している。しかし、住居内からはこれらの遺物は出土していないことから、野鍛冶によって行われていたことが推測される。

遺物について

土体を占める遺物は、曾利I式からIII式及び加曾利E式までであり、縄文時代前期及び後期の遺物は見受けられなかった。このことは、この時代の純粋の集落址であることを示すものである。

しかし、調査を行ったのは社口遺跡としてみればほんの一部分であり、今後の調査如何によつては確認できるかもしれない。

調査面積は、全体で約1,700m²でこの中で遺構が確認できなかつたのは台地から低地にかけてへの斜面及び極端に幅の狭いところだけであり、ほぼ全域から遺構が検出されていることから、社口遺跡としての範囲は非常に広く今回の調査は、その遺跡自体の西の縁に幅10mの長大なトレンチを入れたようなものであり、社口遺跡の全体の一端をかいしまみただけであろう。

おわりに

社口遺跡は平成6年の1月と平成6年の7月はじめから12月末まで調査が行われた。夏は、強い日差しの中、写真撮影のために何回となく水を撒き、冬は身も凍るような八ヶ岳おろしの中で測量を行つた。特に冬場は、10cm以上もある霜を削った日が続き、大変な毎日であった。しかしそんな過酷な条件の中でも無事調査が終了できたのは、作業員の皆さんとの協力によるものだった。

最後に発掘調査及び遺物整埋、本書作成にご協力・ご指導をいただいた各位をはじめ関係諸氏に対し、心より厚く感謝申し上げます。

* 参考文献 *

- 高根町教育委員会 1984 「東久保遺跡」
- 高根町教育委員会 1986 「西ノ原遺跡・石堂遺跡」
- 山梨県教育委員会 1986 「柳坪遺跡」
- 高根町教育委員会 1987 「町内遺跡分布調査報告書」
- 山梨県教育委員会 1992 「西の入遺跡・篠八田遺跡」
- 山梨県教育委員会 1992 「青木北遺跡・梅の木遺跡」
- 山梨県教育委員会 1993 「川又坂上遺跡調査報告書」
- 高根町 1989 「高根町誌通史編」
- 高根町郷土研究会 1990 「高根町地名誌」

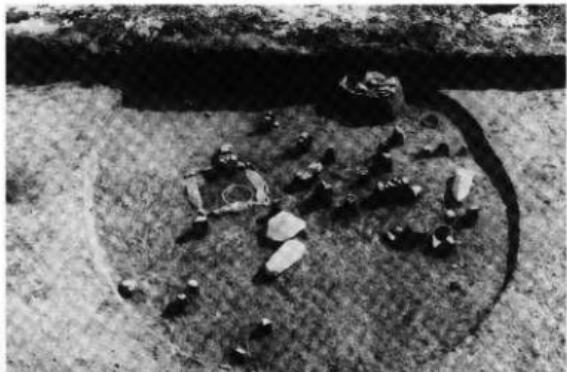
図版



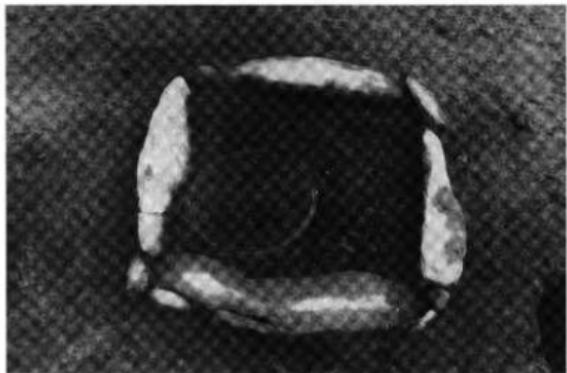
近景 北より



近景 南より



平成5年度
第1号住遺物出土状況



平成5年度
第1号住炉



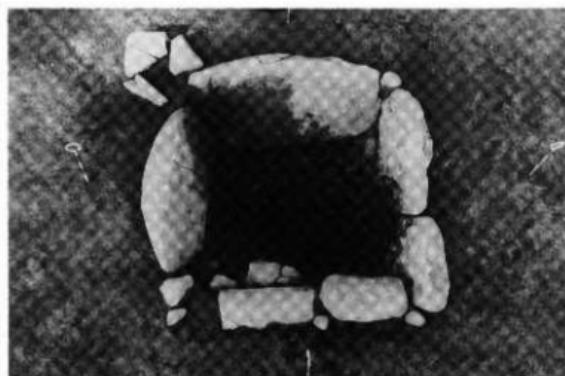
平成5年度
炉内出土土器



平成 5 年度
第 1 号埋甕検出状況



平成 5 年度
第 2 号住居址
遺物出土状況



平成 5 年度
第 2 号住炉完掘状況



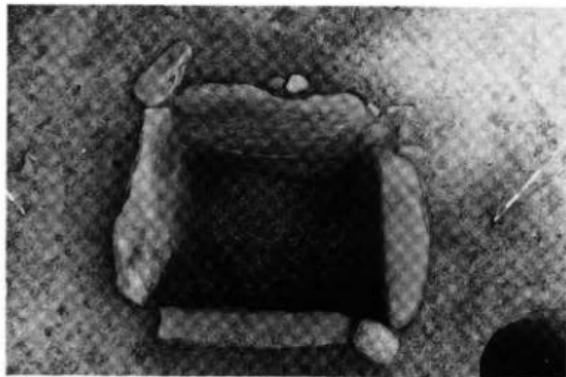
平成 6 年度
第 1 号住居址



平成 6 年度
第 2 号住居址



平成 6 年度
第 3 号住居址
遺物出土状況



平成 6 年度
第 3 号住炉完掘状況



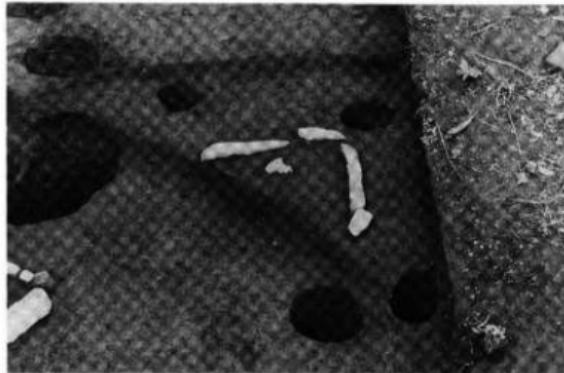
平成 6 年度
第 4 号住居址



平成 6 年度
第 4 号住炉検出状況



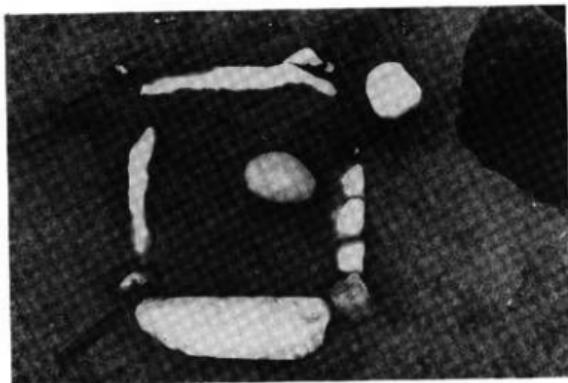
平成 6 年度
第 4 号住塙埋納状況



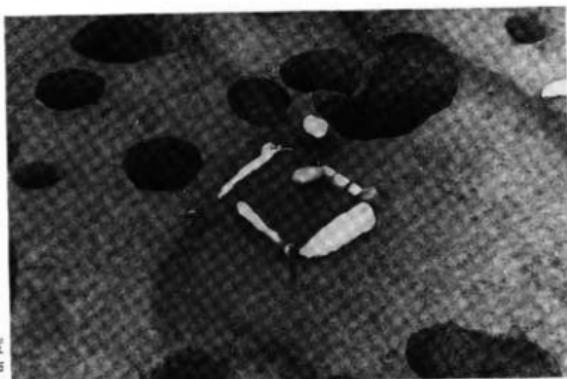
平成 6 年度
第 5 号炉検出状況



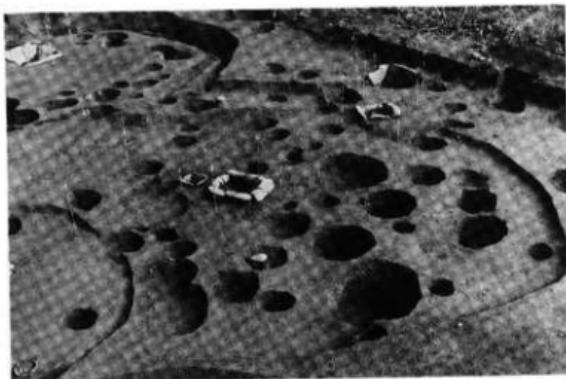
平成 6 年度
第 5 号炉



平成6年度
第6号住居検出状況



平成6年度
第6号炉

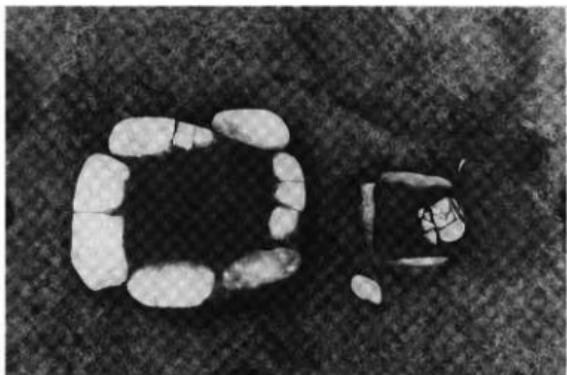


平成6年度
第7号住居址検出状況

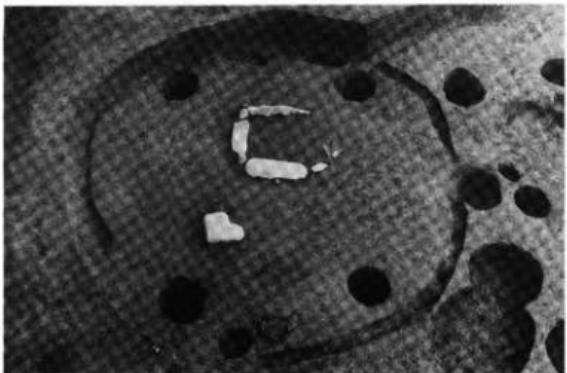
平成 6 年度
第 7 号住炉検出状況
南より



平成 6 年度
第 7 号住炉検出状況
東より

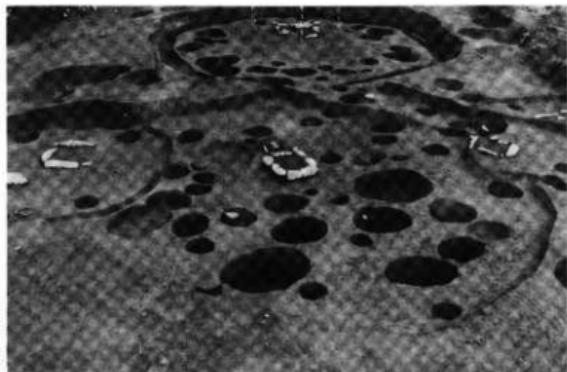


平成 6 年度
第 8 号住居址検出状況





平成 6 年度
第 8 号住居炉検出状況



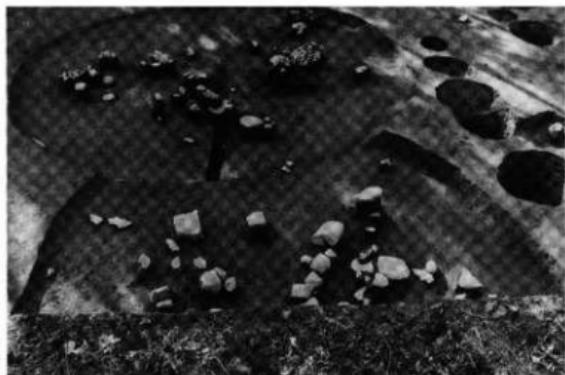
平成 6 年度
第 4・5・6・7・8 号
住居址群状況写真



平成 6 年度
第 9 号住居址
遺物出土状況



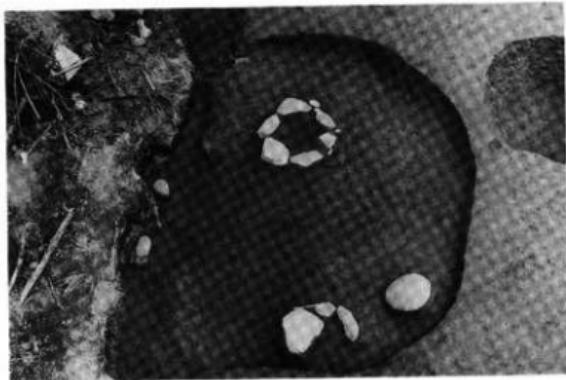
平成 6 年度
第10号住居址
遺物出土状況



平成 6 年度
第11号住居址
遺物出土状況



平成 6 年度
第 9・11・16 号住居址群
完掘状況



平成6年度
第12号住居址検出状況



平成6年度
第12号炉



平成6年度
第12号石組及び
石皿出土状況

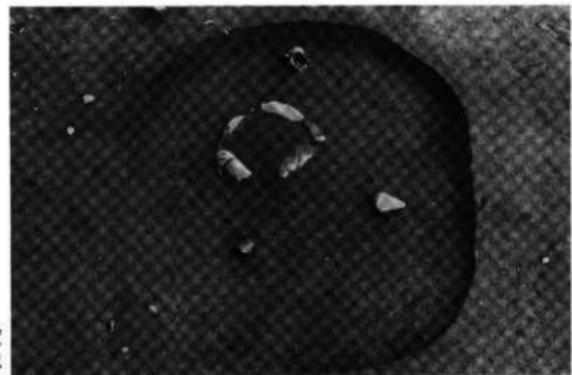
平成 6 年度
第13号住居址検出状況



平成 6 年度
第13号住炉

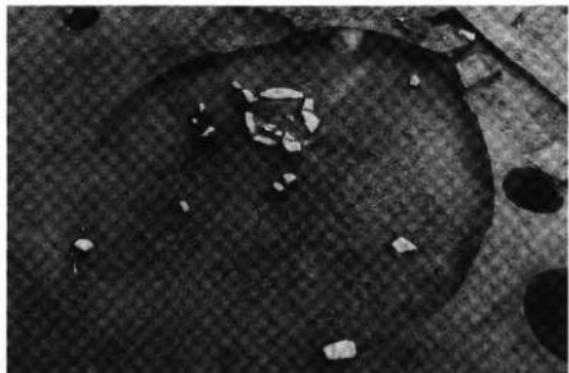


平成 6 年度
第14号住居址検出状況





平成 6 年度
第14号住居遺物出土状況

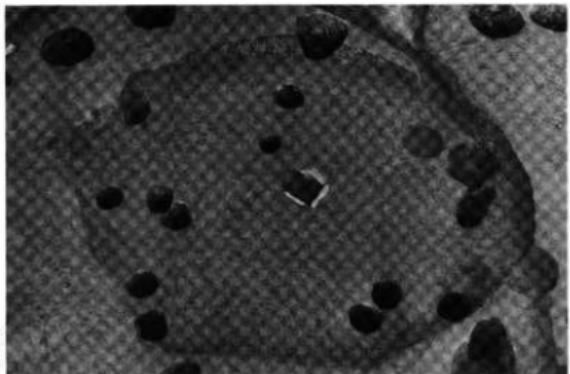


平成 6 年度
第15号住居址検出状況

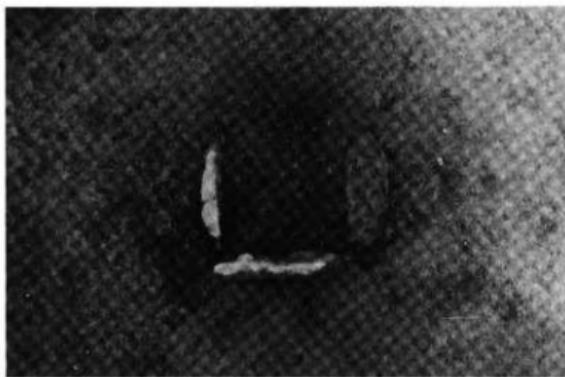


平成 6 年度
第15号住炉

平成 6 年度
第16号住完掘状況

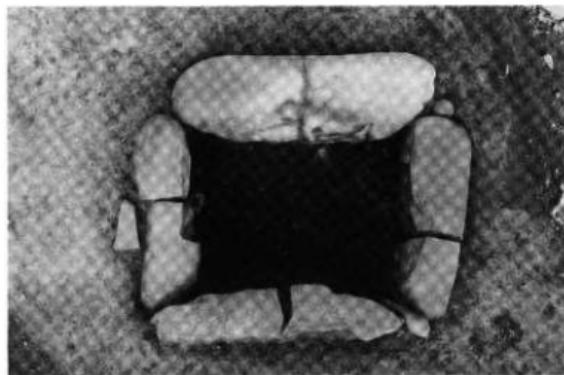


平成 6 年度
第16号住炉

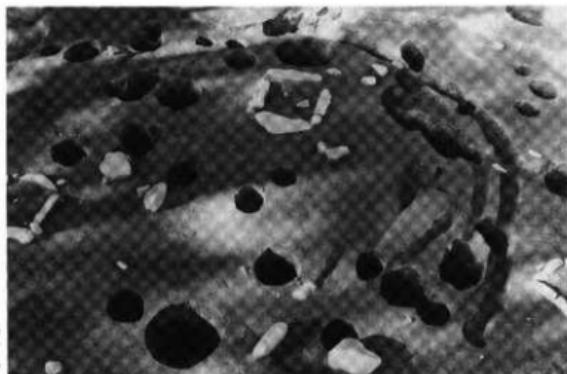


平成 6 年度
第17号住検出状況





平成 6 年度
第17号住炉完掘状況

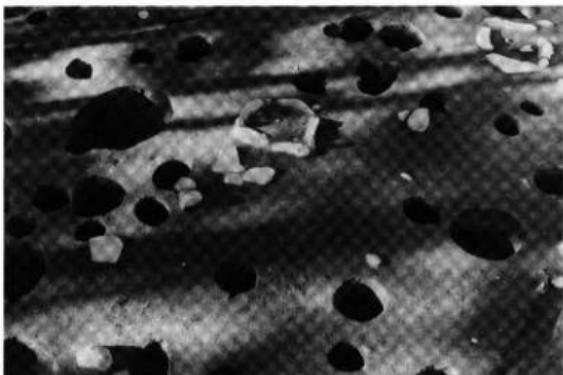


平成 6 年度
第18号住居址検出状況

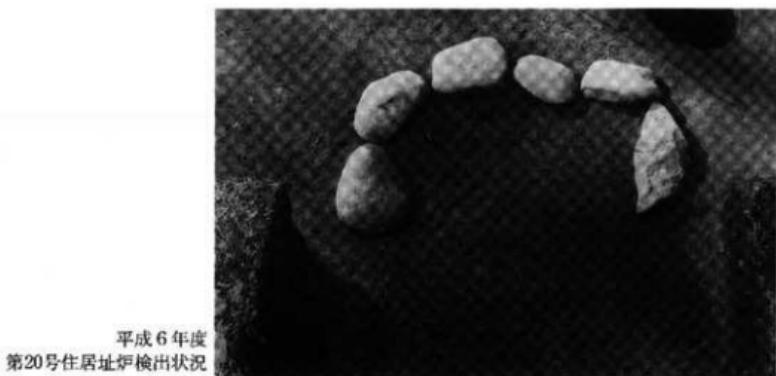


平成 6 年度
第18号住炉

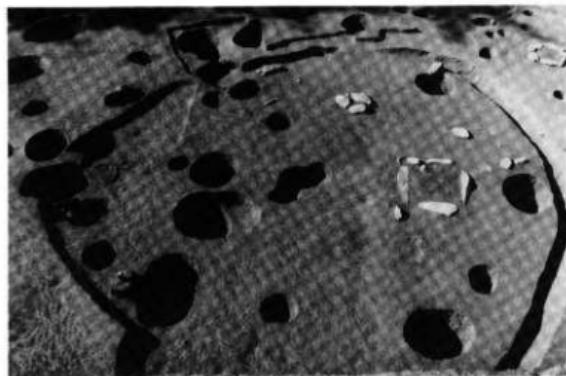
平成 6 年度
第19号住居址検出状況



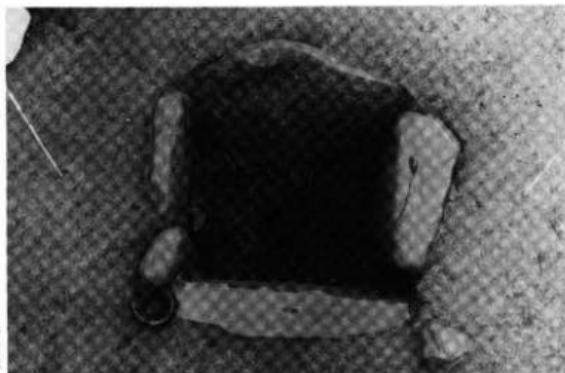
平成 6 年度
第19号住居址



平成 6 年度
第20号住居址炉検出状況



平成 6 年度
第21号住居址検出状況

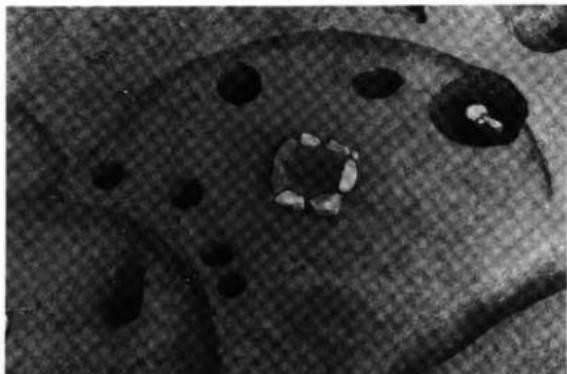


平成 6 年度
第21号住炉完掘状況



平成 6 年度
第21号住廐埋納状況

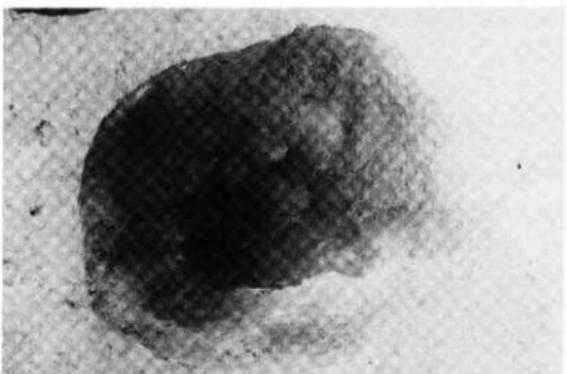
平成 6 年度
第22号住居址検出状況



平成 6 年度
第22号住居址



平成 6 年度
第23号住居址炉壳掘出状況

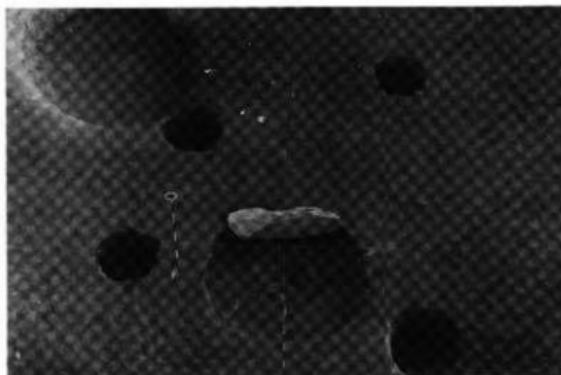




平成 6 年度
第24号住居址
石組検出状況



平成 6 年度
第24号住居



平成 6 年度
第25号住居址検出状況



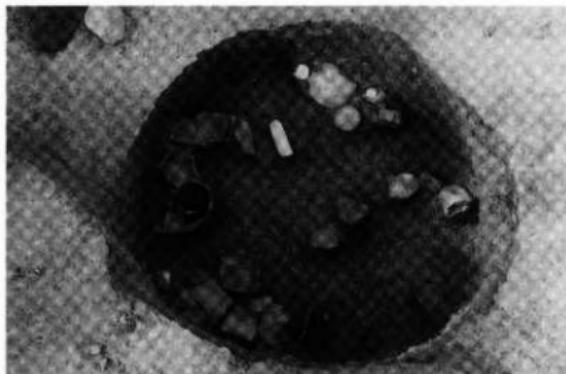
平成 6 年度
第25号住居址炉完掘状況



平成 6 年度
第26号住居址検出状況



平成 6 年度
第26号住炉



平成 6 年度
第23号土坑遺物出土状況

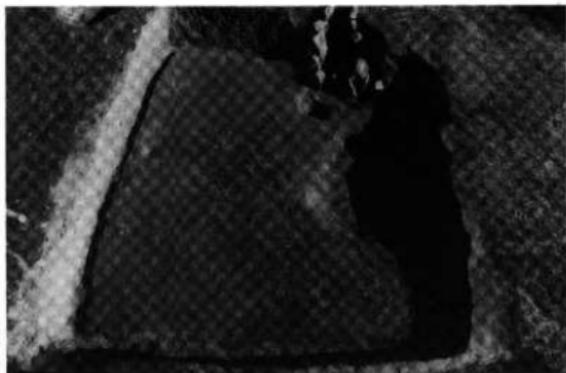


平成 6 年度
第49号土坑遺物出土状況



平成 6 年度
第65号土坑遺物出土状況

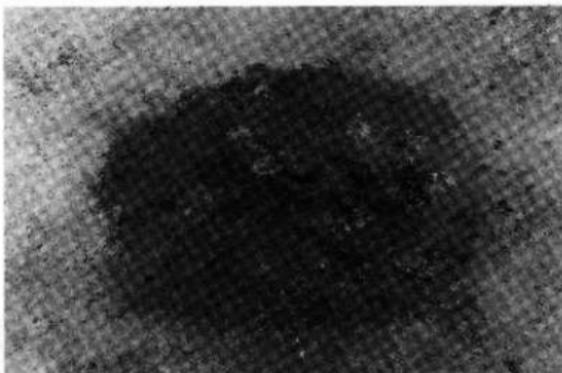
平成 6 年度
第27号住居址完掘状況



平成 6 年度
第27号住カマド



平成 6 年度
第 1 号土坑検出状況



高根町埋蔵文化財 第8集

平成7年3月24日 印刷

平成7年3月31日 発行

社口遺跡

発行所 高根町教育委員会

印刷所 島北印刷株式会社

